

篠山春日能

令和四年四月九日(土)
午前10時半開場 午後一時半開演
国重要文化財 春日神社能舞台

能 二人静
大槻 裕一
大槻 文蔵

立出の一声

福王 茂十郎

大鼓 山本 哲也
小鼓 上田 敦史

笛 斎藤 敦

後見 赤松 禎友
武富 康之

地謡 稲本 幹汰
上田 祐崇
笠田 薫

斎藤 拓信
上田 祐司
寺澤 貴弘
幸祐

狂言 仏師

茂山 千五郎

山下 守之

後見 井口 竜也

能 天鼓

觀世鏡之丞

福王 知登

大鼓 山本 寿弥
小鼓 上田 敦史

太鼓 上田 慎也
笛 斎藤 敦

間 弄鼓之舞 茂山 茂

後見 上田 貴弘
觀世 淳夫

地謡 上田 顕崇
笠田 祐樹
山田 信輔

武富 康之
赤松 禎友
寺澤 幸祐
上田 祐司

大槻 文蔵

日本を代表するシテ方観世流能楽師。
平成28年(2016)「能シテ方」として重要無形文化財保持者・各個認定(人間国宝)となる。

能「二人静」 場所 奈良 勝手神社

正月、吉野の勝手神社の神職(ワキ)から命じられ、菜摘女(ツレ)が雪の野辺で神事のための若菜を摘んでいると、ひとりの女(前シテ)が現れた。女は名も告げず、自分の追善供養してもらいたい、この話を疑うならば菜摘女に憑依して名乗ろう、と言いつつ消える。

驚いて神社に戻った菜摘女はこの出来事を神職に伝え、信じがたい話だと口にした途端、先ほどの女の霊が憑依し、自らを静御前だと仄めかす。ならば舞ってみせよと神職に促され、生前、神社に奉納した装束をまとうと、同じ装束姿の静(後シテ)が現れ、菜摘女に影のように寄り添い共に舞う。静は舞いながら、義経と伴に都から雪の吉野山へ逃れ、ここで別離を言い渡された時のことを語り、供養を頼んで消え去るのだった。

狂言「仏師」
自宅に建立した御堂のご本尊を求めて京に上ってきた田舎者が、往來で仏師を探していると、すっぱ(詐欺師)に声をかけられる。自分は真仏師(正統派の仏師)(シテ)だと騙るすっぱに仏像を注文し、明日出来上がると言われる。当日、田舎者が約束の場所へ行くと、待っていた仏師は仏像が完成していると言う。置かれた場所へ見に行くが、どうも印相が気に入らない。実はこの仏像、すっぱがなりすましたもの。田舎者は仏師に手直しを頼みにいき、先ほどの場所に戻ると、慌てて異なる印相で立つ仏像がある。だがまだ気に入らない田舎者は、仏師のところへ行く。この繰り返し果てに混乱した仏師は……。

能「天鼓」 場所 中国 (前場)皇帝の宮殿 (後場)呂水の畔
中国、後漢の時代、とてもよい音のする鼓をもつ天鼓という少年がいた。評判を聞いた皇帝が鼓を召し上げようとすると天鼓は拒み、そのため呂水に沈められ殺される。皇帝は鼓を手に入れたものの誰が打つても音が出ず、天鼓の父(王伯(前シテ)なら鳴らせるのではと勅使(ワキ)を遣る。息子を失い悲嘆にくれる王伯は参内し、鼓を打ったところ、妙な音が響きわたる。感嘆した皇帝は褒美を与え、天鼓を音楽で供養しようと管弦講を行うことにした。呂水の畔で管弦講を始めると、天鼓の亡霊(後シテ)が法要を感謝して現れた。愛器との再会に喜んで鼓を打ち鳴らして舞い、夜明けとともに消えていった。

自由席の方
チケット確認後、「席札」をお渡ししますので、名前をご記入いただき、自席の目印としてお使いください。

指定席の方
チケットに記載の席種・席番号をご確認いただき、開演時間までにご着席ください。

再入場について
チケット確認後、開演までの出入りは自由ですが、再入場の際は、チケットの半券をご提示ください。

■ 会場内でのお願い
・座席での写真撮影及びフラッシュ撮影はお控えください。
・開演中、携帯電話は電源を切るか、マナーモードに設定してください。
・会場内での飲食はお控えください。

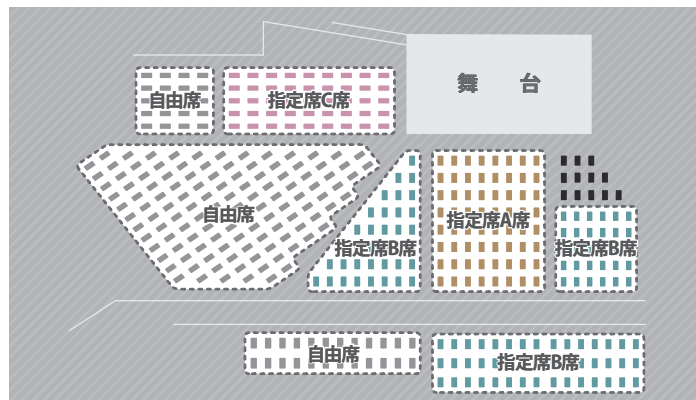
■ お手洗いのご案内
会場のお手洗いは混み合いますので、特産館ささやまもご利用下さい。

■ ローソンチケットの購入方法
全国のローソン・ミニストップ店内に設置されているLoppiの端末で、「各種番号をお持ちの方」を選択し、コード【53279】を入力してお手続きください。操作終了後、Loppiから出力された申込券により、レジにてチケットをご購入ください。

コロナウイルス感染対策として

- スタッフのマスク着用・検温
- 会場入口での検温、マスク着用確認
- 受付でのビニールカーテンの設置
- チケット購入者への連絡先聞き取り
- アルコール消毒液の設置及び消毒作業
- 座席同士の距離の確保

座席図



座席数

- 指定席A席 64席
- 指定席B席 111席
- 指定席C席 45席
- 自由席 163席
- 関係者席

春日神社能舞台



全国でも6ヵ所しかない、貴重な国重要文化財の能舞台。能楽愛好家と知られた、篠山藩第13代藩主・青山忠良が文久元年(1861)に寄進建立した。